

『從吾道人語録』の研究

——「求心録」——（上）

水野 実・三沢 三知夫 編

序 言

『從吾道人語録』は、王守仁の門人董濼の文集である。本書の「從吾道人」は董濼の号、また「語録」は三種の語録に雑文を加えた内容となっている。この他、董濼の経歴と本書の概略については、『從吾道人語録』の研究—王守仁の遺言「日省録」—（『防衛大学校紀要』第八十輯）を参照されたい。

「求心録」は「日省録」が董濼の質疑に対する師王守仁の応答によって構成される、所謂王守仁の語録としての性格とは異なり董濼自身の思想の記録である。本稿はまた直接彼の思想の基礎的研究ということになる。

本稿は「蓬左文庫」蔵『王門宗旨』付録の『從吾道人語録』を定本とした訓読と語釈を中心に置き、さらに他書における同種の文との校合を行った。（一）『陽明先生遺言録』、（二）『王文成公全書』もしくは特

に「伝習録」、(三)『明儒学案』卷十四「布衣董蘿石先生漢」の同種の文との異同を調査し、校異として付すことにした(一)・(二)は同種の文の存在の可能性は極めて低いと考えられたが、確認しておくことは意味のあることと考えた。なお本稿の末には「求心録」における董漢の思想の特徴を箇条書きであげることにするが、今回は紙面の都合上、その前半部のみ成果をあげる。

この研究の参加者は次の通り。阿部光麿(早稲田大学助手)・大場一央(早稲田大学大学院博士後期課程)・上村新治(早稲田大学大学院修士課程)・小池亘(早稲田大学大学院修士課程)・田村有見恵(早稲田大学大学院修士課程)・富岡健太郎(早稲田大学大学院修士課程)・中嶋諒(早稲田大学大学院修士課程)・原信太郎(早稲田大学大学院修士課程)・松野敏之(早稲田大学大学院博士後期課程)・宮下和大(早稲田大学大学院博士後期課程)・三沢三知夫の十一名。全員で検討・修正した原稿を基に、阿部・大場・小池・三沢の四君と再三検討を行い、最後に三沢君と補正を行い、三沢君にまとめてもらった。

この度の研究成果の最後の責任は水野にあるが、参加者全員、特に三沢君をはじめ阿部・大場・小池君の業績でもあることを明記しておく。

【一】

内不見己、外不見人、即是任理。

【訓読】

内に己を見ず、外に人を見ざるは、即ち是れ理に任すなり。

〔語釈・出典〕

○内不見己、外不見人 『易経』 艮卦卦辞の「其の背、其の身を獲ず、其の庭に行き、其の人を獲ず」を念頭に置いたものと思われる。

〔校異〕 (一) (『陽明先生遺言録』)

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕 (二) (『王文成公全書』)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕 (三) (『明儒学案』 卷十四)

本則は『明儒学案』のものとは一致する。

〔二〕

千病万病從妄想生。故善学者常令此心在無物処。

〔訓読〕

千病万病は妄想より生ず。故に善く学ぶ者は常に此の心をして無物の処に在らしむ。

〔語釈・出典〕

○千病万病 あらゆる欠点、悪癖。

○妄想 『楞嚴經』卷一に「一切衆生、無始より来たり、生死相続、皆な常住の真心・性淨の明体を知らざるに由り、諸々の妄想を用ふ。此の想、真ならず。故に輪転有り」とある。

○無物 『中庸』第二十五章に「誠ならざれば物無し」とある。また『老子』第十四章に「其の上なる穢ならず、其の下なる昧ならず。繩繩として名づくべからず、物無きに復帰す。是れを状無きの状、物無きの象と謂ふ」とある。

〔校異〕(一)『陽明先生遺言録』

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)『王文成公全書』

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)『明儒学案』卷十四

○千病万病 『明儒学案』は「千病万痛」に作る。

【三】

李延平先生教人大抵令於靜中体認大本。未発時氣象分明、即処事忘物自然中節。此乃程楊門下相伝指訣也。

〔訓読〕

李延平先生、人をして大抵、靜中に於て大本を体認せしむ。未発の時の氣象、分明ならば、即ち事に処し物に応じて自然に節に中る。此れ乃ち程・楊門下相伝の指訣なり。

〔語釈・出典〕

○李延平先生 李侗。字は愿中、延平先生と称される。南劍州劍浦の人。『宋史』卷四百二十八・

『宋元学案』卷三十九に伝有り。朱熹の師。

○李延平先生く相伝指訣也 『延平答問』補録では「李延平先生」を「李先生」に作り、「程楊」を

「龜山」に作り、「也」の一字が無い。なお『延平答問』補録は周木の編集で、この条はもともと

『言行録』にあったもの。

○大抵 おおよそ。

○大本 『中庸』第一章に「中なる者は、天下の大本なり」とある。

○未発 『中庸』第一章に「喜怒哀楽の未だ発せざる、之を中と謂ふ」とある。

○分明 あきらかなこと。

○中節 『中庸』第一章に「発して皆な節に中る、之を和と謂ふ」とある。

○程・楊 二程とその弟子楊時。

○指訣 秘訣。

〔校異〕(一)〔陽明先生遺言録〕

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)〔王文成公全書〕

『王文成公全書』で李侗に言及しているものとして、『伝習録』卷上、七十六条がある。そこで王守仁は程頤の未発の前に中を求めてはならないという説(『河南程氏遺書』卷第十八、第八十二条)と李侗の未発の前の氣象を体認するという説(「延平李先生答問後録」)とを調停している。

〔校異〕(三)〔明儒学案〕卷十四)

本則は『明儒学案』には収められていない。

〔四〕

甘泉先生寄 先師詩云、一念正時便是惺。須知惺處亦無情。無情知見真知見。到了參前即性靈。先師答之云、休論寂寂與惺惺、不妄由来即性情。笑得殷勤諸老子、翻從知見覓虛靈。吁、可與知者道也。

〔訓読〕

甘泉先生、先師に寄する詩に云ふ、一念の正しき時は便ち是れ惺。須く知るべし、惺處も亦た無情なるを。無情の知見は真の知見。參前に到らば即ち性靈、と。先師、之に答へて云ふ、論ずるを休めよ、寂寂と惺惺と。不妄の由来は即ち性情。笑ひ得たり、殷^{かた}ろに諸を老子に勤め、知見に翻從し虚靈を覓む、と。ああ、与に知るべき者は道なり。

〔語釈・出典〕

○甘泉先生 湛若水。字は元明、号は甘泉。増城の人。『明史』卷二百八十三・『明儒学案』卷三十

七に伝有り。陳獻章の弟子であり、王守仁の学友・講友。

○一念正時便是惺々到了参前即性靈　この詩は『湛甘泉先生文集』卷二十六に「陽明贈方吏部帰樵四首金山出示次韻」の第三首としてあるが、第二句を「要知念処也無情」に作る。

○到了参前即性靈　『論語』衛靈公第十五に「言、忠信ならず、行、篤敬ならざれば、州里と雖も行われんや。立ちては則ち其の前に参するを見、輿に在りては則ち其の衡に倚るを見る」とあり、「参前」とは「忠信篤敬」を常に意識する状態を言う。また『大学或問』には「若し其の前に参し衡に倚るを見れば、則ち成性存存して道義出ず」とある。「成性」とは『易経』繫辞上に「成性存存、道義の門」とあるのを踏まえ、我々人間にもともと具わっている理であり、天から与えられたものを指す。

○性靈　王畿の「白鹿洞統講義」（『龍溪王先生全集』卷之二）には「先師云ふ、心の良知、之を聖と謂ふ。良知は性の靈なり」とあり、同じく王畿の「松原晤語寿念菴羅文」（『龍溪王先生全集』卷之十四）には「良知は性の靈にして物の則なり」とある。

○休論寂寂与惺惺々翻從知見覓虛靈　この詩は『王文成公全書』卷二十外集二に「別方叔賢四首」の

第三首（正徳五（一五一〇）年から翌年にかけてのもの）としてあるが、第三句を「笑却殷勤諸老子」に作る。

○殷勤諸老子 この部分は湛若水が『老子』に打ち込んでいることを指す。

〔校異〕（一）（『陽明先生遺言録』）

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕（二）（『王文成公全書』）

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕（三）（『明儒学案』卷十四）

本則は『明儒学案』には収められていない。

〔五〕

心官不可曠職、去能心勝心傲心妄心貪心妬心欺心嗔心。

〔訓読〕

心官は曠職すべからず、能心・勝心・傲心・妄心・貪心・妬心・欺心・嗔心を去れ。

〔語釈・出典〕

○曠職 職務をおこしたり、おろそかにすること。『漢書』卷九十八、第六十六元后伝に「臣久しく病むこと連年、数々出でて外に在り、曠職素餐たり」とある。

○能心 できると思ふ心。

○勝心 人に勝とうとする心。

○嗔心 いかりの心。

〔校異〕(一)『陽明先生遺言録』

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)『王文成公全書』

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)『明儒学案』卷十四(一)

本則は『明儒学案』には収められていない。

【六】

吾所謂無即濂溪無極之無、非末世邪禪之所謂無也。作無贊曰、無真無、非凡無。凡無不有、真無不無。惟其不無、為万有爐。知其有守其無、靜專動直、造化在吾。於乎、名其為物無可似、又何以庖羲之画・茂叔之図也邪。

【訓読】

吾の所謂無は即ち濂溪の無極の無、末世邪禪の所謂無に非ざるなり。無の贊を作りて曰く、無は真無にして、凡無に非ず。凡無は有ならず、真無は無ならず、と。惟だ其れ無ならず、万有の爐たり。其の有を知り其の無を守り、静專動直、造化吾に在り。ああ、其の物たるに名づくるも似るべき無からん、又何ぞ庖羲の画・茂叔の図を以てせんや。

【語釈・出典】

○濂溪 周敦頤。字は茂叔、道州營道の人。『宋史』卷四百二十七、『宋元学案』卷三・十一・十二に伝有り。主要な著作として『太極図説』・『通書』がある。

○無極 『太極図説』に「無極にして太極」とある。

○凡無 有無相對の無。

○真無 有無相對を成り立たしめている無。

○靜專動直 『易經』繫辭上に「其の靜なるや專、其の動なるや直」とある。

○庖羲之画 庖羲は三皇の一。八卦を画したといわれる。

○茂叔之図 周敦頤の『太極図』。

○万有爐 外丹において爐は火を生ずる器具であり、そこから万物が生ずる。

〔校異〕(一)〔『陽明先生遺言録』〕

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)〔『王文成公全書』〕

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)〔『明儒学案』卷十四〕

本則は『明儒学案』には収められていない。

【七】

至虚至近動而神。只此元来一箇真。有却又無、無却有。談空說有、是何人。

【訓読】

至虚至近は動にして神なり。只だ此れ元来、一箇の真。有は却て又無、無は却て有。空を談じ有を説く、是れ何人ぞや。

【校異】(一)『陽明先生遺言録』

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

【校異】(二)『王文成公全書』

本則は『王文成公全書』には収められていない。

【校異】(三)『明儒学案』卷十四

本則は『明儒学案』には収められていない。

【八】

虚者道之原也。万有所自出之地也。作守虚賛曰、至虚至実相、至静至動機、本来無一物。靈変□玄微。安排障断、宝生白。即是万有之根基。混然中処不可見。廓然太公一以帰。自今以往吾将從事於斯。

【訓読】

虚は道の原なり。万有の自ら出ずる所の地なり。守虚の賛を作りて曰く、至虚は至実の相、至静は至動の機、本来無一物。靈変□玄微。安排の障断たれ、室、白を生ず。即ち是れ万有の根基なり。混然たる中処は見るべからず。廓然太公一以て帰す、と。今より以往、吾、将に斯に従事せんとす。

【語釈・出典】

○靈変□玄微 山下龍二氏の「董濼（蘿石）『従吾道人語録』について」（名古屋大学文学部研究論集 六十九、哲学二十三、一九七六年）では□を「且」とする。「靈変」は変化が迅速であることを形容したものの。「玄微」は奥深く微妙なこと。

○安排 あれこれとりはかろうとすること。

○室生白 『莊子』内篇人間世篇に「彼の関を瞻る者は、虚室に白を生じ、吉祥も止まるところに止

まる」とある。

○廓然太公 「故に君子の学は廓然として太公、物来たりて順応するに若くは莫し」(『河南程氏文集』卷第二、明道先生文二、「答横渠張子厚先生書」とある。心がからつとして、少しのかたよ
りもないこと。

〔校異〕(一)〔陽明先生遺言録〕

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)〔王文成公全書〕

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)〔明儒学案』卷十四)

本則は『明儒学案』には収められていない。

【九】

凡狗己所欲、投人所好、皆謂之逐物。

〔訓読〕

凡そ己の欲する所に狗ひ、人の好む所に投ずる、皆な之を物を逐ふと謂ふ。

〔語釈・出典〕

○狗 「狗」は徇の俗字。したがうの意。

○逐物 自己の外にある物を追い求めること。

〔校異〕(一)〔陽明先生遺言録〕

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)〔王文成公全書〕

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)〔明儒学案〕卷十四)

本則は『明儒学案』には収められていない。

【十】

良知最易知最難致。其要只是改過而已。

〔訓読〕

良知は最も知り易く最も致し難し。其の要は只だ是れ過を改むるのみ。

〔校異〕(一)〔陽明先生遺言録〕

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)〔王文成公全書〕

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)〔明儒学案〕卷十四

本則は『明儒学案』には収められていない。

〔十一〕

知過即是良知、改過即是致知。

〔訓読〕

過を知るは即ち是れ良知、過を改むるは即ち是れ致知。

〔校異〕（一）（『陽明先生遺言録』）

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕（二）（『王文成公全書』）

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕（三）（『明儒学案』卷十四）

本則は『明儒学案』と一致する。

【十二】

書稱高宗恭默思道。愚以為凡思道者則自然恭默、非恭默以思道也。若一時不在道則此心放逸而恭默之容無矣。

〔訓読〕

『書』は高宗の恭默思道を稱す。愚、以為らく、凡そ道を思ふ者は則ち自然に恭默にして、恭默以て道を思ふに非ざるなり。若し一時も道に在らざれば則ち此の心、放逸にして恭默の容、無きなり。

〔語釈・出典〕

○書称高宗恭默思道 『書經』説命上に「恭黙して道を思ふ」とある。

○恭黙 恭敬莊重。落ち着いていて寡言。

〔校異〕(一) 『陽明先生遺言録』

本則是『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二) 『王文成公全書』

本則是『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三) 『明儒学案』卷十四)

○書称高宗 『明儒学案』にはこの四字が無い。

○愚以為 『明儒学案』にはこの三字が無い。

【十三】

敬次 先師韻求教。為学当從一念真。莫將聞見駭時人。要知靜默無為處、自有円虚不測神。殻種慈培須有事。鏡光拂拭反生塵。藏而後発無方体、聴取江門碧玉陳。

〔訓読〕

敬しんで 先師の韻に次して教を求む。為学は当に一念の真に従ふべし。聞見を將つて時人を駭すること莫れ。静黙無為の処を知らんと要むれば、自ら円虚不測の神有り。穀種慈培して須く事とする有るべし。鏡光拂拭すれば、反て塵を生ず。藏して後、無方の体を発き、江門碧玉陳を聴取す。

〔語釈・出典〕

○次：韻 他人の詩と同じ韻字をその順序どおりに用いて詩を作ること。

○一念 現在一瞬の心の動き。

○有事 『孟子』公孫丑章句上に「必ず事とする有り」とある。

○拂拭 よごれを払うこと。

○鏡光ゝ生塵 『伝習録』巻上、六十二条には「近世格物の説、鏡を以て物を照らすが如く、照上に功を用ひ、鏡の尚ほ昏きを知らず（在）、何ぞ能く照らさん。先生の格物、鏡を磨きて之を明らかならしむるが如く、磨上に功を用ひ、明（了）らかなる後、又未だ嘗て照を磨さず」とあり、『六祖壇経』巻上、二、悟法伝衣門には「菩提本と樹無し。明鏡も亦た台に非ず。本来無一物。何処に塵埃有らん」とある。

○無方体 『易経』繫辞下に「故に神は方無くして易は体無し」とある。

○江門碧玉陳 未詳。

〔校異〕（一）『陽明先生遺言録』

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二) (『王文成公全書』)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三) (『明儒学案』卷十四)

本則は『明儒学案』には収められていない。

〔十四〕

丁亥六月二十一、夜五更、夢得四字、云冥思歛真。

〔訓読〕

丁亥六月二十一、夜五更、夢に四字を得、冥思して真を歛すと云ふ。

〔語釈・出典〕

○丁亥 嘉靖六(一五二七)年。

○五更 一夜を五つに分けた時間の単位が更。五更とは夜明けの二時間くらい前。

○冥思歛真 未詳。『宋景濂未刻集』「詩塚銘」には「冥智真を歛し諸を至神に返す」とある。また

『書経』堯典には「欽明文思」の四字が見える。

〔校異〕(一) (『陽明先生遺言録』)

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕（二）〔王文成公全書〕

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕（三）〔明儒学案〕卷十四

本則は『明儒学案』には収められていない。

〔十五〕

心無不思時。皆吾心之變化、自然如此。不必懼也。忽然而起、忽然而止。忽然在彼、忽然在此。至靈至妙、不可測度。雖思而無思、無思而無不思。動即靜、靜即動。但要去邪念、不必去思而求寂靜。正如天然。或為明星朗月、或為和風甘雨、或為祥雲瑞日、或為嚴霜重露、種種格別、皆是太虛。初未嘗有無象太虛。太虛非此、則亦無體。此雖可見、然即太虛本不可見。雖有變化、實無作為。靜即動、動即靜。非動非靜、亦非不動不靜。但愆陽・伏陰・流孝・薄蝕之類如人之有邪念耳。余因明道先生思入風雲變態中之句、而推写其意如此。

〔訓読〕

心に思はざるの時無し。皆吾が心の變化にして、自ら然ること此くの如し。必ずしも懼れざるなり。忽然として起こり、忽然として止む。忽然として彼に在り、忽然として此れに在り。至靈至妙にして、測度すべからず。思ふと雖も、而ども思ふこと無く、思ふこと無くして、而ども思はざること無し。動は即ち靜。靜は即ち動。但だ邪念を去るを要めるのみにして、必ずしも思ひを去りて寂靜を求めず。正に天の如く然り。

或いは明星朗月を為し、或いは和風甘雨を為し、或いは祥雲瑞日を為し、或いは嚴霜重露を為し、種種格別、皆是れ太虚なり。初めより未だ嘗て無象の太虚有らず。太虚此れに非ざれば、則ち亦た体無し。此れ見るべしと雖も、然れども即ち太虚本より見るべからず。変化有りと雖も、実に作為無し。静は即ち動、動は即ち静。動に非ず静に非ずして、亦た不動不静に非ず。但だ愆陽・伏陰・流幸・薄蝕の類は、人の邪念有るが如きのみ。余、明道先生の風雲變態中に入るを思ふの句に因りて、推して其の意を写すこと此くの如し。

〔語釈・出典〕

○動即靜靜即動 『王文成公全書』卷之五、文錄二「答倫彦式」には「心は靜動無き者なり。其の靜なるや、以て其の体を言ふ。其の動なるや、以て其の用を言ふ。故に君子の学、靜動に間無し」とある。

○太虚 『伝習録』卷下、六十九条に「良知の虚は便ち是れ天の太虚、良知の無は便ち是れ太虚の無形。日月・風雷・山川・民物、凡そ貌象形色有るは、皆太虚無形の中に在りて、發用流行し、未だ嘗て天の障碍を作し得ず」とある。

○愆陽 冬なのに暖かいこと。異常氣象。

○伏陰 夏の時節に霜や雹が降ること。

○薄蝕 日蝕。

○明道先生 程顥。字は伯淳、洛陽の人。『宋史』卷四百二十七、『宋元学案』卷十三・十四に伝有り。弟とあわせて二程子と呼ばれ、その二程理学は朱熹に継承された。

○思入風雲變態中之句 『河南程氏文集』卷第三、明道先生文三、「秋日偶成二首」に「間来、事として従容せざる無く、睡り覚めて東窓の日、已に紅。万物静観するに皆自得、四時の佳興、人と同じ。道、天地に通じ形外有り、思ひ風雲變態中に入る。富貴淫せず貧賤に楽しみ、男兒此ここに到らば是れ豪雄」とある。

〔校異〕(一)〔陽明先生遺言録〕

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)〔王文成公全書〕

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)〔明儒学案』卷十四)

『明儒学案』には「但要去邪念、不必去思。思者、吾心之變化也。正如風・雨・露・雷、種種格別、皆是太虚。太虚非此則亦無体。此雖可見、然実無作為、亦何從而見之也」とある。

【十六】

但有一毫厭人之心、即謂之不敬。稍有此心則人先厭我矣。此合内外之道也。

〔訓読〕

但だ一毫の人を厭ふの心有らば、即ち之を不敬と謂ふ。稍や此の心有らば、則ち人先ず我を厭はん。此れ内外を合するの道なり。

〔語釈・出典〕

○合内外之道 『中庸』第二十五章に「誠は自ら己れを成すのみに非ず。物を成す所以なり。己を成すは仁なり。物を成すは知なり。性の徳なり。内外の道を合するなり」とある。

〔校異〕(一)『陽明先生遺言録』

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)『王文明公全書』

本則は『王文明公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)『明儒学案』卷十四)

『明儒学案』には「此合内外之道也」の七字が無い。

〔十七〕

今我此心求空而不可得。更説甚麼記誦詞章。

〔訓読〕

今、我此の心、空を求めて得べからず。更に甚麼の記誦詞章を説かん。

〔語釈・出典〕

○記誦詞章 詩文の総称。

〔校異〕(一)『陽明先生遺言録』

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)〔王文成公全書〕

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)〔明儒学案』卷十四)

本則は『明儒学案』には収められていない。

〔十八〕

慈湖先生云、格物不可以窮理言。蓋其文曰格耳。雖有至字義何為乎転而為窮。其文曰物耳。初無理字義、何為乎転而為理。程子之意、蓋為物不必盡去、故遷就而為窮理之說。殊不知、古人深病學者溺於物、故不得已而為說。是豈曰盡取事物而屏之邪。豈曰去物而就無物邪。有去有就、猶未離乎物也。蓋吾心本無物、忽有物焉。格去之可也。物格則吾心自瑩。天高地下万物散殊十百千万、皆吾心耳。本無物也。若曰今日格一物、明日格一物、窮盡万理、乃能知至、吾知其不可也。愚按慈湖此說与 先師之說、雖異而実同。不相約而相符。蓋陽明云、格者正也。正其事物也。欲事物之正、必從理達欲而後可。慈湖云、格者去也。格去其物也。不見有物則純乎理而已矣。講解雖不同、俱在心体上用功。若曰窮理、則理不在物、必欲周知、徒增知識。何与聖功哉。

〔訓読〕

慈湖先生云ふ、「格物は窮理を以て言ふべからず。蓋し其の文は、格と曰ふのみ。至字の義有りと雖も何

爲れど転じて窮と爲さん。其の文は物と曰ふのみ。初めより理字の義無ければ、何爲れど転じて理と爲さん。程子の意は、蓋し物たる必ずしも盡くは去らざるに、故に遷就して窮理の説を爲す。殊に古人の、学者、物に溺るるを深く病み、故に已むを得ずして説を爲すを知らず。是れ豈に盡く事物を取りて之を屏くと曰はんや。豈に物を去りて無物に就くと曰はんや。去る有り就く有るは、猶ほ未だ物を離れざるなり。蓋し吾が心本より無物、忽ち物有り。之を格去すれば可なり。物格せば則ち吾が心自ら瑩らかなり。天の高きより地の下まで、万物散殊すること十百万、皆吾が心のみ。本より無物なり。若し『今日一物を格し、明日一物を格し、万理を窮め盡くして、乃ち能く知至る』と曰はば、吾其の不可を知るなり」と。愚按ずるに、慈湖の此の説と先師の説とは、異なると雖も而れども実は同じ。相ひ約せずして相ひ符す。蓋し陽明云ふ、「格は正なり。其の事物を正すなり。事物の正を欲すれば、必ず理に従ひ欲に違ひて後可なり」と。慈湖云ふ、「格は去なり。格は其の物を去るなり。有物を見ざれば則ち理に純なるのみ」と。講解同じからずと雖も、俱に心体上に在りて功を用ふ。若し窮理と曰はば、則ち理は物に在らず、必ず周く知りて、徒らに知識を増さんと欲す。何ぞ聖功に与らんや。

〔語釈・出典〕

○慈湖先生 楊簡。字は敬仲、慈溪の人。『宋史』卷四百七・『宋元学案』卷七十四に伝有り。陸九淵の高弟。

○格物 『大学』経に「知を致すは物を格すに在り」とある。

○遷就 本意からずれ逸脱すること。

○窮理之說 程頤の窮理説は『易經』説卦伝の「理を窮め性を盡くし以て命に至る」を踏まえ、「格は至なり。祖考來格の格の如し。凡そ一物上、一理ありて、須く是れ其の理を窮致すべし」(『河南程氏遺書』卷第十八、伊川先生語四、第二十七條)と云う。

○格去 司馬光の『大学中庸義』の説。「格」を「去」と解釈する。

○今日格一物、明日格一物、窮盡万理、乃能知至 『河南程氏遺書』卷第十八、伊川先生語四、第二十七條に「須く是れ今日一件に格り、明日又一件に格り、積習既に多くして、然る後、脱然自ら貫通する処有り」とある。

○陽明云、格者正也。正其事物也。欲事物之正、必從理遵欲而後可 『伝習録』卷上、八十六條に「格とは正すなり。其の正しからざるを正して、以て正に帰するなり」とある。

○慈湖云、格者去也。 『慈湖遺書』卷十、家記、論語上には「之を格去すれば可なり」とある。

〔校異〕(三) 参照。

○講解 解釈。

〔校異〕(一) (『陽明先生遺言録』)

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二) (『王文成公全書』)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三) (『明儒学案』卷十四)

本則は『明儒学案』には収められていない。ただし、『十八』の前半の「慈湖先生云、…」は『慈湖遺書』巻十、家記、論語語上、第四十一条を踏まえるので、敢えてそれを全て引用した。困み線部が【十八】の文。また『慈湖遺書』に無いが【十八】にあるものを（ ）として付しておいた。

子曰士志於道而恥惡衣惡食者未足与議也。此心在道則不在物、在物則不在道。恥惡衣惡食、是墮在事物中為事物移換。未能格物而欲致之。是無理也。格物不可以窮理言。（蓋其）文曰格耳。雖有至

（字）義、何為乎転而為窮。（其）文曰物耳。初無理字義。何為乎転而為理。堯經直說格有去義、格去其物耳。程氏【二十八】では「氏」を「子」に作る）倡窮理之說。其意、蓋謂（為）物、不必

（盡）去。去物則反成偽、既以去物為不可、故不得不委曲遷就而為窮理之說。（殊）不知、書不盡言言不盡意、古人謂欲致知者在乎格物、深病學者之溺於物而此心不明、故不得已（而）為是說。（是）

豈曰盡取事物、（而）屏而去之邪。豈曰去物而就無物邪。有去有（就）取、猶未離乎物也。格物之論論吾心中事耳。（蓋）吾心本無物、忽有物焉。格去之可也。物格則吾心自瑩、塵去則鑑自明、滓去則

水自清矣。天高地下（一）萬物生之中（散殊）十有（百）千萬、皆吾心耳。本無物也。天下同帰而殊塗、一致而百慮、天下何思何慮。事物之紛紛起於念慮之動耳。思慮不動、何者非一、何者非我。思慮不動、尚無一与我。孰為衣与食必如此、而後可以謂之格物。格物而動於思慮、是其為物愈紛紛耳、

尚何以為格。若曰今日格一物、明日又格一物、窮盡万理、乃能知至、吾知其不可也。程氏自窮理有

得、遂以為必窮理而後可、不知其不可以律天下也。

【十九】

今人不依良知者、即異端也。

【訓読】

今人の良知に依らざる者は、即ち異端なり。

【語釈・出典】

○異端 聖人の教えとは異なる正統ではない考え方。『論語』為政第二に「子曰く、異端を攻むるは斯れ害のみ」とある。

【校異】(一) (『陽明先生遺言録』)

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

【校異】(二) (『王文成公全書』)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

【校異】(三) (『明儒学案』卷十四)

本則は『明儒学案』には収められていない。

【二十】

但依得良知、礼法自在其中矣。

【訓読】

但だ良知に依り得れば、礼法は自ずから其の中に在り。

〔校異〕(一)〔陽明先生遺言録〕

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)〔王文成公全書〕

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)〔明儒学案〕卷十四

本則は『明儒学案』のものと一致する。

【二十一】

先須認得無位真人、即良知也、即是心也。無位者不執著也。

〔訓読〕

先ず須く無位の真人は即ち良知、即ち是れ心なるを認め得べし。無位とは執著せざるなり。

〔語釈・出典〕

○無位真人 『臨濟録』上堂に「赤肉団上に一無位の真人有り。常に汝等諸人の面門より出入す。

未だ証拠せざる者看よ看よ、と。時に僧有りて出問す。如何なるか是れ無位の真人、と。師、禅
牀を下つて把住して云ふ、道へ道へ、と。其の僧擬議す。師托開して云ふ。無位の真人は是れ什
麼の乾屎橛ぞ、と。便ち方丈に帰る」とある。

〔校異〕(一)〔陽明先生遺言録〕

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)〔王文成公全書〕

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)〔明儒学案〕卷十四)

本則は『明儒学案』には収められていない。

【二十二】

省言甚難、今得一法。但莫説人、則言自省。

〔訓読〕

言を省くは甚だ難きも、今一法を得る。但だ人に説く莫ければ、則ち言自ら省かれん。

〔校異〕(一)〔陽明先生遺言録〕

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)〔王文成公全書〕

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)〔明儒学案〕卷十四)

本則は『明儒学案』には収められていない。

【二十三】

常令此心在無物処、心無所希。名之曰道。

〔訓読〕

常に此の心をして無物の処に在らしめば、心に希ふ所無し。之を名づけて道と曰ふ。

〔語釈・出典〕

○無物の処 何ものにもとらわれない境地。『老子』第十四章に「其上なる皦ならず、其の下なる昧ならず。繩繩として名づくべからず、物無きに復帰す。是れを状無きの状、物無きの象と謂ふ」とある。

〔校異〕(一) (『陽明先生遺言録』)

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二) (『王文成公全書』)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三) (『明儒学案』卷十四)

『明儒学案』には「常令此心在無物処」の八字が無い。

【二十四】

有心為惡、其過莫大。有心為善是亦為罪。

〔訓読〕

心、悪を為す有れば、其の過ちは莫大なり。心、善を為す有るも是れ亦た罪と為す。

〔校異〕(一)〔陽明先生遺言録〕

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)〔王文成公全書〕

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)〔明儒学案〕卷十四)

本則は『明儒学案』には収められていない。

【二十五】

見就是性。

〔訓読〕

見は就ち是れ性なり。

〔語釈・出典〕

○見就是性 〔校異〕(三) 参照。

〔校異〕(一)〔陽明先生遺言録〕

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)〔王文成公全書〕

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)〔明儒学案〕卷十四)

『明儒学案』は「見性是性」に作っている。

【二十六】

氣浮者其志不確。心愈者其造不深。外誇者其中日陋。此先師之言也。

〔訓読〕

氣浮なる者は其の志確かならず。心愈なる者は其の造深からず。外に誇る者は其の中、日に陋なり。此れ先師の言なり。

〔語釈・出典〕

○心愈 「愈」は粗雑。「心愈」は心が乱れ専一でない状態。『陽明先生遺言録』上、第五十五条に「蓋し心氣稍や愈ならば則ち仁に非ず」とある。

○其造不深 『孟子』離婁章句下に「深く之に造るに道を以てするは、其の自ら之を得んと欲すればなり」とある。

〔校異〕(一)〔陽明先生遺言録〕

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)〔王文成公全書〕

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)〔明儒学案〕卷十四)

本則は『明儒学案』には収められていない。

【二十七】

静黙箴。多言量淺、好動燥故。惟靜惟默、真體呈露。顔也如愚、程也如塑。從事於斯、庶幾無誤。外惟靜默、内不多事。耳若無聞、目若無眠。孔也。惡佞、孟也。惡智。從事於斯、庶幾無悔。

〔訓読〕

静黙箴。多言にして量淺く、動を好み故を燥ふ。惟れ静にして惟れ默ならば、真體呈露す。顔や愚の如く、程や塑の如し。斯に従事せば、誤り無きに庶幾からん。外は惟れ静黙にして、内は多事ならず。耳は聞く無きが若く、目は眠り無きが若し。孔や佞を惡み、孟や智を惡む。斯に従事せば、悔い無きに庶幾からん。

〔語釈・出典〕

○燥故 「燥」はうれえること。「故」は過去の経験・事実。

○惟靜惟默 『老子』第二十一章に「道の物爲る、惟れ恍惟れ惚たり。惚たり恍たり、其の中に象有り」とある。

○顔也如愚 『論語』為政第二に「子曰く、吾、回と言ふこと終日、違はざること愚なるが如し」

とある。

○程也如塑 『河南程氏外書』卷第十二、伝聞雜記に「明道先生坐すること泥塑人の如し」とある。

○無眠 『龍溪王先生全集』卷之一、三山麗沢録に「遵巖子曰く、『先師、軍中に在ること四十日、未だ嘗て眠らず。諸れ有りや』と。先生曰く、『然り』とある。

○孔也悪佞 『論語』先進第十一に「子路、子羔をして費の宰為らしむ。子曰く、夫の人の子を賊はん。子路が曰く、民人有り、社稷有り、何ぞ必ずしも書を読み、然る後に学と為さん。子曰く、是の故に夫の佞者を悪む」とある。

○孟也悪智 『孟子』離婁章句下に「智に悪む所は、其の整つが為なり」とある。

〔校異〕(一)〔陽明先生遺言録〕

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)〔王文成公全書〕

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)〔明儒學案』卷十四)

本則は『明儒學案』には収められていない。

【二十八】

欲識無為理、胸中不掛絲為。心之累去盡、則性可見。

〔訓読〕

無為の理を識らんと欲すれば、胸中に絲を掛けざるを為せ。心の累去り盡くさば、則ち性、見はるべし。

〔語釈・出典〕

○絲為 『楚辞』漁父に「自ら放た令むるを為す」（自令放為）とある。「絲為」の「為」は助辞と見ても良い。

〔校異〕（一）『陽明先生遺言録』

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕（二）『王文成公全書』

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕（三）『明儒学案』卷十四

本則は『明儒学案』には収められていない。

【二十九】

自治心病方。仁者我藥、義者塞藥、礼者乱藥、智者惑藥、誠者妄藥、訥者佞藥、静者欲藥、廉者貪藥、謙者傲藥、容者□□、□□□□、□□□藥、勤者怠藥、儉者奢藥、卑者誇藥、讓者競藥、正者邪藥、虚者蒲藥、問者迷藥、操者忘藥。藥非外藥、心病心藥。

〔訓読〕

自ら心病を治すの方あり。仁は我の薬、義は塞の薬、礼は乱の薬、智は惑の薬、誠は妄の薬、訥は佞の薬、静は欲の薬、廉は貪の薬、謙は傲の薬、容は□□、□□□□、□□□□、勤は怠の薬、儉は奢の薬、卑は誇の薬、讓は競の薬、正は邪の薬、虚は蒲の薬、問は迷の薬、操は忘の薬。薬は外薬に非ず、心病には心薬あり。

〔語釈・出典〕

○塞 道理が見えない状態。

○蒲 未詳。

〔校異〕(一)〔陽明先生遺言録〕

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)〔王文成公全書〕

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)〔明儒学案』卷十四)〕

本則は『明儒学案』には収められていない。

〔三十〕

刪去 顔子屢空。聖人空空妙乎哉。

〔訓読〕

刪去 顔子は屢々空し。聖人は空空として妙なるかな。

〔語釈・出典〕

○刪去 蓬左文庫本にはこの書き込みがある。

○顔子屢空 『論語』先進第十一に、「子曰く、回や其れ庶きか、屢々空し」とある。

〔校異〕(一) 『陽明先生遺言録』

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二) 『王文成公全書』

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三) 『明儒学案』

本則は『明儒学案』には収められていない。